

# こども磨き

## 「こども詩」(小学校高学年)の実践から

大阪府大阪市立阪南小学校

橋本 正勝

### はじめに

「子どもに詩を書かすな。」丸谷才一先生の言葉。しかし、竹中郁は「詩らしきもの」(こども詩)を書かせることに生涯をかけた。二十年足らずのつたない研究ではあるが、故人竹中郁の教えを学び、目の前の子どもたちからいただいた宝物をここに紹介し、今後の私の学びの糧にしたいと考える。

### 一「よく見る」―こども詩の基盤

「正直に・飾らずに・簡潔に」これが、竹中郁の「こども詩」の根本に据えられた原則だと考える。私は、子どもの作品を評価する観点として、これを大切にしている。今、はっきりと言えることは、「よく見る」暮らしを築くことか、この三点に迫る方法、ということだ。

飼育委員会で、毎日うさぎの世話。家でもうさぎを育てている。まさに「うさぎと一体」

白いうさぎ  
五年 男子  
朝  
目をこおり色にして死んだ  
ほかのうさぎ  
ぜんぶ耳を下げてる

の彼の暮らし。『白い』『こおり色』『ぜんぶ耳を下けている』……。『よく見る』生活態度が生み出した『こども詩』だ。

### 二『かわいらしさ』をこえるものは

高学年の詩のスタイルには、『たくみさ』『かつこよさ』『順序立て』『理屈っぽさ』が目立ちはじめてくる。低学年のありのままの『かわいらしさ』をこえるものは何か。それは、仲間との心のつながりを通して大きく芽生える『はにかみ』『はじらい』『つつみかくし』ためらい』などの感情である。

こんなことが言い合える学級。いや、書いて

けんかして  
泣いてたら  
博ちゃん  
まゆちゃん  
いおりちゃんが来て  
「どうしたん？」  
止まりかけてた涙が  
またでてる

て読んで感じ合える学級。高学年担任だからこそ味わえる幸せ。

何とも楽しい雰囲気、学級にやわらかな空気をかもし出す。

### 三詩作活動から生まれるものは

教室のロッカーの隅の箱に、印刷したプリントの余りを裏返して入れておく。子どもたちは、何かを見つけたら、それに書いて『どきん箱』(私は詩と言わずに『どきん』と読

小運動会

五年 女子

白がゆうしようしました  
一年生の車いすの子は  
赤のぼうしをかぶった  
みさぎちゃん  
みさぎちゃんの赤いぼうしを  
見ていたら  
私の白がかったのに  
かなしくなりました

んでいる)に入れにくる。印刷し、次の日に皆の前で本人が朗読する。そんな毎日を繰り返している、一人一人の子どもの、やさしさが見えてくる。聞いている仲間の笑う顔も、日ごとにもろやかになってくる。

これぞまさに、こども詩を書く活動からただける副産物である。

これが尊い。知らず知らずのうちに、子どもと子どもの心がつながっていく。子どもと担任の心が結びついていく。

#### 四 やんわりと批判するこども心

世の中の矛盾、世間の大人の発言を、子どもは心でとらえている。その心を、どきん紙にやんわりと書き綴る。子どもなりの的確な批判。うーんとうならせてしまうこの力。

ふつうの子

五年 女子

ふつうの子が先生をさした  
ふつうの子が警官をさした  
「ふつうの子が…」  
「ふつうの子が…」  
ニュースでは言うてるけど  
どこからどこまでか  
「ふつうの子？」  
うちもクラスのみんなも  
「ふつうの子」です

#### 五 ユーモアこそ子ども魂

DNA

六年 男子

「DNAって何の略か知ってるか」  
急に父さんがきいてきた  
「どうにもならんアホや」  
ほんでなおまえが「DNAや」  
半分笑いながら父さんが言った  
「でもな父さん」  
「DNAは親から子へ」  
うけつがれんねんやろ  
ぼくが「DNAやったら」  
父さんも「DNAやんか」  
逢坂家毎週日曜日恒例の  
しょうもない会話が終わった  
今日はぼくの勝ち

#### 六 初めて詩作を試みる時には

高学年を受け持った担任として、心がけたことを二つ三つ。

- (1) たくさん喋らせて、少し書いて(助けて)あげましょう。
- (2) そんな、幼稚なことをして、という声には耳をかさないで。
- (3) 知っている、あたりまえ、という高学年児の意識をぶつこわし、対象を鋭くとらえ、自分や友だちを静かに見直すには、ゆきつもどおり時間がかかります。

#### おわりに

「よく見る」訓練を日々継続する活動が、生きた言葉を育む。自然に言葉が磨かれる。学級が活性化され、授業が生き生きとしてくる。ぜひ一度、試してみませんか。

はしもと まさかつ 大学で子どもの詩と出会いその「とりこ」となる。大阪市こども詩の会で二十年こども詩を勉強。